

あとがき

戦争はこりごりである。二度と起こしてはならない。そのためには日本中の戦争体験者が、自分の体験を吐露し、反戦の訴えを、それぞれの我が子我が孫に、また、近所の人々に語り、書き残し、それぞれの町や村の後世に伝えることである。それが戦争防止の最大の抑止力になるのだ。このことを、特に、望み願っておきたい。

今一つ、断り、そして理解を頂きたいことは、本文中に戦争否定を述べながら、随所に肯定するような、誤解を招くおそれのある記述がある点についてである。

それは決して賛成でも肯定でもないことなのだが、戦時中に生まれた事実の中には、当時の世の中やその時代に生きた人に、はたまた、戦後の社会に役立ち貢献したものもあるという事実を述べたに過ぎない点である。

どんなに惨しく憎らしい戦争であっても、そこに生まれて出遭ってしまった人間は、不幸ではあったが、すべてが悪い人間ではない。戦争への参加は、やむを得ず仕方なく荷担させられ、強制的に信奉させられたのだ。

言いたいことは、そうした人たちにも、生きる権利やそれにまつわる生甲斐、生きる方法手段を求めることの正当性はあるはずだ。これから記載することは、それに拘ってのことである。

戦争という罪悪に巻き込まれ、一緒になって悪の道を歩まされたことは反省するが、戦争が勝利のために生み出したことの中には、一人ひとりの生存と平和になってからの生き方にプラスになったものがあり、それを利用し活用したからこそ生き延びられもし、今日の繁栄や幸福が生まれたという事実もあって、それを伝えたかったにほかならない。

まずもって述べたいことは、決して望ましいことではないが、野蛮人によるような動物虐待以上の苛酷な鍛練で、頑健であらゆる苦難に打ち克つことのできる、強靱な肉体と不屈の精神ができたのではないかという点についてである。

それが、あの苛酷な時代を生き抜く力になり、はたまた、後の世の窮乏を撥ね除け、奇蹟とも思われる復興を成し遂げる原動力になったのではないか。もしそうだとしたら、残念ながら、それは戦争がもたらしたものと見なさざるを得ない。そうしたことが、拾い出してみると結構あり、それを書いたのだった。

思うに、それをまで否定されたら、あの時代に生きた人間は一人として救われず、すべてが罪人扱いされてしまう。それでは我々は立つ瀬がない。そこを誤解せずに、わかってもらえるように強調したまでのことである。

人間は逆境の中で進歩する。この戦争には、そうした一面があったのも確かなことだった。逆境に学び逆境を順境に変える底力を人間は有す、ということの証明にもなった戦争だった。

平和ボケで進歩が遅滞する成熟社会には、反面教師にもなり得ることだといったら、戦争を知らない世代から総スカンを食うだろう。それをいうつもりはない。だが、戦時体験者にはハングリー精神が、偉大な力を生むという体験知を有する人が多い点を知らせたいだけだ。

それ以上に、身近で大切なことは、やたらに付和雷同したり、天下の大勢に流されたりし

ないことである。一部の戦争したが屋を除いては、こういう時に限って、国民の大半は何も知らされず、手もなく騙され、煽動され、洗脳までされて、戦争へと駆り立てられてしまうのだ。「見ざる、聞かざる、言わざる」を暗黙のうちに強要され、戦争主導者に思いのままに操られてしまう。これが怖いのだ。

長いものには巻かれる。寄らば大樹の陰に。流れに逆らっては損。すべてはお上頼み。何より孤立が怖い。袋叩きや村八分されたら大変。強い者、勝ち馬に乗れ。バスに乗り遅れるな。日本人のこうした心理が極めて危険なのだ。

いつまた戦争正当化論者が現れないとも限らない。声高な脅しまがいのアジテーションに弱い日本人は、手も無く捻られ、泣き寝入りさせられてしまうのだ。我々がそうだった。

国防論、専守防衛、正当防衛等々、戦争勃発の理由や理屈はたくさんあろう。しかし、それらがどんなに正しかろうと、死んでしまっただけはおしまいだ。

戦争となれば、勝とうが負けようが、双方に地獄の苦しみがくるのだ。殺死傷の苦痛の上に、赤貧洗うが如き塗炭の苦しみに悩まされ、すべては廃墟に化して無の世界に陥るのだ。それをまざまざと見せつけ思い知らされたのがこの戦争であり、我々だった。

警告といえば、武器を持てば使いたくなる人が出るものだ。そうでなくても、血気にはやって戦いを好む人が出るのもこの世の中だ。ましてや他人に戦わせて、自らは生き延びて、ボロ儲けしようとする悪徳人間もいるのだ。最も困り怖いのは、やられたらやり返すのが何故悪いとして、仇討ちを正当化する思想が蔓延し、それに乗せられて安易に戦争に走ってしまう点である。探せばまだまだあろう。

しかし、あの悲惨な時代を経験した人間は、すべての人が、理由はどうあれ、戦争はしてはならないと、思っているのではなからうか。そのことだけは、胸に止めおいてもらいたい。

その上で、繰り返しになるが、戦争体験者は、生きていうちに反戦記を残し、人類を滅亡の淵から救う営みを、すべての人がこぞってすべきと思うがどうだろう。

それが、不幸にして戦火に倒れ、戦陣に散った同胞への、せめてもの責務ではなからうか。そんな思いを強く抱くものである。

生まれた村、育った町、愛する郷土への恩返しは、再びこの美しくて平和な我が村、我が町を戦場にしないことである。そのために、この小著が役立てば、この上ない喜びである。

令和元年（2019年） 盛夏 椎名仁著す